

# 書美術

公益財団法人  
全国書美術振興会  
会 報

第30号  
平成24年12月13日発行  
発行者 (公財)全国書美術振興会  
編集責任者 坂本敏史  
東京都港区赤坂2-11-1  
宮原ビル6階  
電 話 03-3568-2071  
FAX 03-3568-2072  
ホームページ <http://shobi.or.jp/>

題字は福島慎太郎初代理事長

## 「日本の書展」40回を迎える

公益財団法人として新たな出

発をした今年、「日本の書展」は40回の節目を迎えた。現代書壇を代表する書家が会派を超えて一堂に集まる書展として出品数も増え充実した展覧会になっている。この10年をとっても、新たな九州展の発足、「委嘱」ランクの新設、東京展会場が新たにできた国立新美術館に移るなど、様々な変化をしながら回を重ねてきた。

40回を記念して記念講演会を開催。荒船清彦会長が「書と国際文化交流 日本の視点、世界の視点」と題して講演し、4会場で書家や関係者、一般の方約1100名の聴講があった。また、新たに東京展に「公募臨書」の部を設け、約950点の応募があった。詳細はいずれも後述する。

これからも、当会の活動の原点であり、主軸である「日本の書展」を中心に、書美術の普及、振興を図っていく。  
第40回「日本の書展」の各展報告は以下の通り。

### 関西展

平成24年5月24日(木)  
5月27日(日)

会場 大阪国際会議場

主催 (公財)全国書美術振興会・産経新聞社  
後援 文化庁

協賛 (公社)日本書芸院

本年も関西展からスタートした。関西展の出品数は、巨匠15点、代表71点(計86点が全展を巡回)、委嘱33点、招待373点、秀拔選700点、合計1192点、入場者数は約3400名を数えた。今年も産経新聞紙面にて紹介記事の掲載協力を得ている。



津金孝邦理事長



榎倉香邨顧問



荒船清彦会長

会期初日の5月24日(木)、開催披露に先立ち、大阪国際会議場会議室で記念講演会を開催、その後リーガロイヤルホテル「光琳の間」において、来賓、出品者合わせて約510名の出席による開催披露レセプションを行った。東日本大震災を配慮して中止し、2年ぶりの開催披露パーティーとなった。まず、津金孝邦理事長、荒船清彦会長より主催者挨拶、産経新聞社竹田

### 中部展

○第1会場  
平成24年6月6日(火)  
6月10日(日)

会場 愛知県美術館ギャラリー  
(愛知芸術文化センター8階)



大阪国際会議場



尾崎邑鵬顧問

徹事業局長の共催者挨拶があった。続いて榎倉香邨顧問からは、「書家は群れの中にいても、ひとりになることが大切で、それが書をやっていく上で向上することにつながるものだ」との書家代表挨拶があった。続いて尾崎邑鵬顧問の乾杯の発声により祝宴に入った。

○第2会場  
平成24年6月5日(火)  
6月10日(日)

会場 名古屋市博物館  
主催 (公財)全国書美術振興会・中日新聞社

後援 文化庁・愛知県・岐阜県・三重県・名古屋市・各県市教育委員会・東海テレビ放送

協賛 (公社)中部日本書道会

中部展の出品数は、巨匠、代表の86点、委嘱13点、招待156点、秀拔選616点、合計871点、愛知県美術館ギャラリーを第1会場、名古屋博物館を第2会場として、今回も2会場での開催となった。会期中の入場者数は2会場を合わせて約4000名だった。中日新聞社の紙面紹介、また会期中には東海テレビ放送の放映協力があった。両会場の会期が揃った6月6日(水)に、名古屋東急ホテル



樽本樹邨顧問



中日新聞社高坂毅常務取締役事業担当



名古屋市博物館



愛知県美術館ギャラリー

「バロックの間」で記念講演会を、その後「ヴェルサイユの間」において来賓、出品者合わせて約380名の出席による開催披露レセプションを行った。レセプションでは、津金理事長、荒船会長から主催者挨拶、中日新聞社高坂毅常務取締役事業担当より共催者挨拶があった。続いて樽本樹郎顧問からは、今展の会場、作品を見て成功だと確信し、「ますます研鑽を重ね、世界に羽ばたくよう頑張ってもら



近藤誠一文化庁長官

「バロックの間」で記念講演会を開催、続いて

平成24年6月14日(木) 6月24日(日)  
会場 国立新美術館  
主催 (公財)全国書美術振興会・共同通信社  
後援 文化庁  
東京展の出品数は、巨匠、代表の86点、委嘱40点、招待56点、秀拔選865点に加え、関西展、中部展、九州展の委嘱58点も同時に展示し、総展示数は1614点と直轄4展の中で最多となった。入場者数は10日間で約9700名だった。

会期初日の6月14日(木)、ホテルオークラ東京本館「曙の間」にて記念講演会を開催、続いて

## 東京展

平成24年6月14日(木)

6月24日(日)

会場 国立新美術館

主催 (公財)全国書美術振興会・共同通信社

後援 文化庁

東京展の出品数は、巨匠、代表の86点、委嘱40点、招待56点、秀拔選865点に加え、

関西展、中部展、九州展の委嘱58点も同時に展示し、総展示数は1614点と直轄4展の中で

最多となった。入場者数は10日間で約9700名だった。

会期初日の6月14日(木)、ホテルオークラ東京本館「曙の間」にて記念講演会を開催、続いて

平成24年6月14日(木)

6月24日(日)

会場 国立新美術館

主催 (公財)全国書美術振興会・共同通信社

後援 文化庁

東京展の出品数は、巨匠、代表の86点、委嘱40点、招待56点、秀拔選865点に加え、

関西展、中部展、九州展の委嘱58点も同時に展示し、総展示数は1614点と直轄4展の中で

最多となった。入場者数は10日間で約9700名だった。

会期初日の6月14日(木)、ホテルオークラ東京本館「曙の間」にて記念講演会を開催、続いて

平成24年6月14日(木)

6月24日(日)

会場 国立新美術館

主催 (公財)全国書美術振興会・共同通信社

後援 文化庁

東京展の出品数は、巨匠、代表の86点、委嘱40点、招待56点、秀拔選865点に加え、

関西展、中部展、九州展の委嘱58点も同時に展示し、総展示数は1614点と直轄4展の中で

最多となった。入場者数は10日間で約9700名だった。

いたい」との書家代表挨拶があった。続いて東海テレビ放送加藤昭宏事業局長の乾杯の発声により、祝宴に入った。  
次回第41回展は、あいちトリエンナーレ開催により愛知県美術館ギャラリーの展示スペース借用縮小のため、第1会場の愛知県美術館ギャラリーに巨匠、代表、委嘱、招待の作品を、第2会場の名古屋市博物館に秀抜選の全作品を展示予定。



国立新美術館

隣の「平安の間」において開催披露レセプションを行い、来賓、出品者合わせて約600名の出席があった。レセプションでは、津金理事長、荒船会長から主催者挨拶、共同通信社古賀尚文代表取締役社長から共催者挨拶があり、例年後援をいただいていた



浜田和幸外務大臣政務官



新井光風常務理事

る文化庁から近藤誠一長官の来賓祝辞があった。当会が2月に公益財団法人としてスタートを切ったこと、またこの40回展から公募臨書の部を設けたことについても触れられ「書を広く普及する上で素晴らしい企画である。東日本大震災以降、日本人が古来より伝えてきた精神性、日本の文化の神髄をどのように次の世代に伝えていくべきかと考えているが、荒船会長の講演にもあったように、書は総合芸術であり、書いた人の人となりを表すもの。日本人の精神性をさらに養い、経済発展と同時に心の豊かさ、先人が伝えてきた自然観、人への優しさに、礼儀、思いやりを伝えるのに有意義な芸術だと認識した」との祝辞をいただいた。続いて新井光風常務理事からは出品書家を代表して、当会の活動趣旨や、出席の先生方に対し、これまでの数々の国内展、海外展への協賛について感謝の意を表し、「書美術の振興が書を通じて心を伝えるもの、そして人間の心と心を結ぶ重要な役割を持つものであり、今後より一層よい作品を発表していくよう心掛けたい」と挨拶があった。その後、参議院議員浜田和幸外務大臣政務官から「書こそが人を表す文化のいちばんの源。皆さん方にも、日本の文化に対してもっと自信を持って、書を通じて世界との友好関係を深めていただき、そして書という芸術を広めていただきたい」との挨拶と乾杯の発声があり、祝宴に入った。



松清秀仙評議員



師村妙石参事

平成24年7月5日(木) 7月10日(火)  
会場 福岡アジア美術館  
主催 (公財)全国書美術振興会・西日本新聞社  
後援 文化庁  
九州展の出品数は、巨匠、代表の86点、委嘱12点、招待132点、秀拔選223点、合計453点、会期中の入場者数は約2100名だった。例年西日本新聞社の紙面で大きく取り上げている。  
7月5日(火)、ホテル日航福岡「チェルシー」において記念講演会、続いて「平安の間」にて開催披露レセプションを行い、来賓、出品者合わせて約120名の出席があった。レセプションではまず、津金理事長、荒船会長から主催者挨拶、西日本新聞社から主催者挨拶、

## 九州展

平成24年7月5日(木)

7月10日(火)

会場 福岡アジア美術館

主催 (公財)全国書美術振興会・西日本新聞社

後援 文化庁

九州展の出品数は、巨匠、代表の86点、委嘱12点、招待132点、秀拔選223点、合計453点、会期中の入場者数は約2100名だった。例年西日本新聞社の紙面で大きく取り上げ

ている。7月5日(火)、ホテル日航福岡「チェルシー」において記念講演会、続いて「平安の間」にて開催披露レセプションを行い、

来賓、出品者合わせて約120名の出席があった。レセプションではまず、津金理事長、荒船

会長から主催者挨拶、西日本新聞社から主催者挨拶、

平成24年7月5日(木)

7月10日(火)

会場 福岡アジア美術館

主催 (公財)全国書美術振興会・西日本新聞社

後援 文化庁

九州展の出品数は、巨匠、代表の86点、委嘱12点、招待132点、秀拔選223点、合計453点、会期中の入場者数は約2100名だった。例年西日本新聞社の紙面で大きく取り上げ

ている。7月5日(火)、ホテル日航福岡「チェルシー」において記念講演会、続いて「平安の間」にて開催披露レセプションを行い、

来賓、出品者合わせて約120名の出席があった。レセプションではまず、津金理事長、荒船

会長から主催者挨拶、西日本新聞社から主催者挨拶、

平成24年7月5日(木)

7月10日(火)

会場 福岡アジア美術館

主催 (公財)全国書美術振興会・西日本新聞社

後援 文化庁

九州展の出品数は、巨匠、代表の86点、委嘱12点、招待132点、秀拔選223点、合計453点、会期中の入場者数は約2100名だった。例年西日本新聞社の紙面で大きく取り上げ

ている。7月5日(火)、ホテル日航福岡「チェルシー」において記念講演会、続いて「平安の間」にて開催披露レセプションを行い、

来賓、出品者合わせて約120名の出席があった。レセプションではまず、津金理事長、荒船

会長から主催者挨拶、西日本新聞社から主催者挨拶、

平成24年7月5日(木)

7月10日(火)

会場 福岡アジア美術館

主催 (公財)全国書美術振興会・西日本新聞社

後援 文化庁

九州展の出品数は、巨匠、代表の86点、委嘱12点、招待132点、秀拔選223点、合計453点、会期中の入場者数は約2100名だった。例年西日本新聞社の紙面で大きく取り上げ

ている。7月5日(火)、ホテル日航福岡「チェルシー」において記念講演会、続いて「平安の間」にて開催披露レセプションを行い、

来賓、出品者合わせて約120名の出席があった。レセプションではまず、津金理事長、荒船

会長から主催者挨拶、西日本新聞社から主催者挨拶、

平成24年7月5日(木)

7月10日(火)

会場 福岡アジア美術館

主催 (公財)全国書美術振興会・西日本新聞社

後援 文化庁

九州展の出品数は、巨匠、代表の86点、委嘱12点、招待132点、秀拔選223点、合計453点、会期中の入場者数は約2100名だった。例年西日本新聞社の紙面で大きく取り上げ

ている。7月5日(火)、ホテル日航福岡「チェルシー」において記念講演会、続いて「平安の間」にて開催披露レセプションを行い、



聞社緒方芳弘執行役員企画事業局長から共催者挨拶があった。続いて師村妙石参事より書家代表挨拶。挨拶の中で、会場となっている福岡アジア美術館について、「書の本格的な展示はこれまでできていなかった。美術館の深いご理解のもと、アジア美術館で展示されることの榮譽に感謝したい」と謝辞を述べた。続いて松清秀仙評議員より「日本の書展で、書を愛する全ての人に感動を与えていきたい。今後とも大いに頑張りましょう」との力強い発声により乾杯し、祝宴に入った。



福岡アジア美術館

### 公募臨書（東京展会場内）

平成24年6月14日（木）

6月24日（日）

会場 国立新美術館

「日本の書展」第40回展を記念して公募展を新設した。出品要項は、昨年の「日本の書展」直轄展、地方巡回展の会場をはじめ、全国の表具店、美術館・博物館、大学等に配布。書を学

ぶ者にとつての基本である臨書に限定して公募をしたところ、初回ながら全国から約9500点の応募があった。12名の審査員により厳正なる審査が行われ、その中からおおよそ半数の473点が入選となった。入選作品は軸、卷子、篆刻額へと表装され、国立新美術館の「日本の書展」東京展の会場内に展示された。会場では出品者や家族、友人らが多く観覧していた。入選作品は表装された状態で、入選證と一緒に入選者に届けられ好評だった。

次回、第41回展の応募は平成24年10月末で締め切れ、年明け1月18日には審査会が予定されている。



「公募臨書」会場

### 第40回

### 「日本の書展」巡回展

毎年「日本の書展」の直轄4展が終了すると、現代書壇巨匠、代表の全作品が、当会と共同通信社、地元各新聞社の共催、文化庁後援のもと全国を巡回する。

地元の作家も出品し、各地それぞれ特徴ある展覧会を開催している。

第40回「日本の書展」巡回展は、次の日程で全9会場で開催。開催地（主催新聞社）・会期・会場の順

○富山（北日本新聞社）

平成24年7月13日～7月16日

富山県民会館

○宇都宮（下野新聞社）

平成24年8月29日～9月3日

FKDショッピングモール宇都宮インターパーク店

○青森（東奥日報社）

平成24年9月6日～9月10日

青森市民美術展示館

○広島（中国新聞社）

平成24年9月27日～10月2日

福屋広島駅前店

○岡山（山陽新聞社）

平成24年10月17日～10月22日

天満屋岡山店 6階葦川会館

○米子（山陰中央新報社）

平成24年10月31日～11月4日

米子高島屋

○奈良（奈良新聞社）

平成25年2月6日～2月10日

奈良県文化会館

○長野（信濃毎日新聞社）

平成25年3月8日～3月11日

長野県信濃美術館

○水戸（茨城新聞社）

平成25年4月13日～4月18日

茨城県立県民文化センター

### 第39回「日本の書展」

### 奈良展のテーマカット

第39回「日本の書展」奈良展が、平成24年2月8日から2月

12日まで、奈良県文化会館で開催された。2月8日の開会式では、杉岡華邨名誉顧問、甫田鶏川顧問のご出席のもと、テーマカットが行われている。



### 東京国立近代美術館に 作品寄贈

昭和の戦後書の世界には巨匠が多く輩出したことに比して、国立のしかるべき美術館に所蔵作品が少ないのが現状だった。全国書美術振興会ではその巨匠の作品を東京国立近代美術館に所蔵、公開していただくことと計画し、理事会・評議員会の承認を得て計画を進行してきた。

東京国立近代美術館との打ち合わせで、戦後書の巨匠のなか

で、文化勲章受章者の作品を寄贈することに決まり、平成23年度は青山杉雨先生、小林斗盞先生の作品の寄贈をご遺族や関係の方に相談。幸い青山慶示氏、小林俊明氏、小林高明氏のご賛同を得て、それぞれ代表作を寄贈していただくことになった。

平成24年2月27日に左記の作品を東京国立近代美術館に寄贈した。

### ■青山杉雨先生

### 題名…巍

出品展覧会…日本万国博覧会

制作年…1970年（昭和45年）



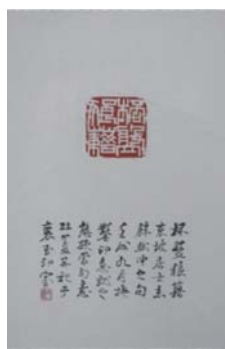
### ■小林斗盞先生（印影と原印）

### 題名…杯盤狼藉

出典…前赤壁賦（蘇東坡）

出品展覧会…第14回回展

制作年…1982年（昭和57年）



# 第40回「日本の書展」 記念講演会 講演要旨 「書と国際文化交流―日本の視点、世界の視点」

元外務省中南米局長、元アルゼンチン大使、  
元スペイン大使、(公財)全国書美術振興会会長  
荒船清彦

開催日・会場

(関西展) 5月24日(木) 大阪国際会議場 会議室1003  
(中部展) 6月6日(水) 名古屋東急ホテル パロックの間  
(東京展) 6月14日(木) ホテルオークラ東京 曙の間  
(九州展) 7月5日(木) ホテルオークラ福岡 チェルシー

多くの書家の方々に前にして、書についてお話しするのは、真に僣越至極ですが、「外交活動から垣間見た書」ということでもご容赦願いたい。

1. 書との出会いとその効用  
私事ですが書との関わりは父から教わったことに始まります。日下部鳴鶴にも習ったことのある父にとって、書は趣味の世界で、弟子は私一人でした。その後、私はほぼ途切れることなく筆に親しみ、何人かの書家の方々のご指導も頂きながら、海外勤務の間も、常時硯の水を絶やさ



ぬように努めてきました。書家の皆様は、書に命をかけておられる。私は、外交にこそ命をかけていましたが、書はあくまでも趣味です。

さて、外交の現場では、日本の文化を語るのに書ほど便利で、それでいてこれ程説明の難しい題材も珍しい。外国のお客は書作品を見て、大概作品の意味を尋ねます。その意味を説明しますと、話は発展して「わび」や「さび」にまで広がります。書では呼吸が大事だなどと言いますと、武道や武士道の話にもなります。また、大使として赴任国の各地を視察しますと、必ず記帳簿に署名させられます。そこでやおろ矢立を取り出しまして、筆で一期一会とでも書いて、署名しますと、珍しがられて質問攻めに遭う。落款を押せば更に効果があります。お世話になった方には、自作の下手な俳句や漢詩を色紙に書いて、英語その他の訳文を添えて贈りますと大変喜ばれます。書を続けていて良かったと思います。

また、20年前ですが、ロサン

日本書道センター除幕式(1992年)



ゼルス総領事時代には、海外初の「日本書道センター」を設立することができました。ロサンゼルスには、千人を超える書の愛好家があり、同地の日系社会が歴史的遺産として大事にしているリトル・トウキョウがあります。そこに日米文化会館という立派な建物があります。当時、日米関係は戦後最悪という状況で、日本叩きがピークを迎えており、私も年間150回を越える講演活動を行うなど、日本の立場を理解してもらうのに大変苦労していた時期でしたが、同文化会館は、書道センターの設立に大変協力してくれ、5階のフロアーの提供だけでなく、米国社会の中で、募金活動までして下さいました。お陰で、日本書道センターは、政府の予算一切なしに実現しています。また、大変名誉なことながら、センターの看板は、書壇の巨匠の故青山杉雨先生のお考えで、未熟ながら私が揮毫させて頂きました。この日本書道センターは、その後全米書道公募展を開催するなど活発な活動を続けていました

が、残念ながら、現在は休眠状態にあります。

## 2. 日本文化の豊かさ

(1) 貧しさを恥とせず、知識欲旺盛な国民性

1549年に日本を訪れた聖フランシスコ・ザビエルは、イエズス会の仲間やパトロンであるポルトガル国王宛の手紙の中でこう述べておられます。「この国の人びとは今までに発見された国民のなかで最高であり、彼らは、……一般に善良で、悪意がありません。……貧しいことを不名誉とは思っていません。……そして、日本人は、好奇心旺盛で、知識欲も強く、寝る暇もないほどの質問攻めにあう」と。

この貧しさを恥としないことや知識欲は、かけがえのない日本の精神文化です。

## (2) 多様な日本文化

しかし、戦後の日本は、不可避免的に経済偏重でしたし、日本を拝金主義の国だと思っている人達が世界には意外と多く、この誤解は、外交活動や国益に大きな支障となり得ます。そこで、日本の繁栄の裏には、豊かで多様な文化があることをPRすることが大変重要になります。所謂文化広報活動です。毎年在外公館では「日本週間」と称して、日本の多様な文化から、いくつか選び出して、展示や演奏などの公演を行っています。書のほか、茶道、華道から、歌舞伎、文楽、俳句・和歌、和服、武道、相撲、お祭り等の伝統文化や、ファッション、現代産業技術、

カラオケ、アニメなどの現代文化と、その選択に毎年嬉しい悲鳴をあげるわけです。

## (3) 国際文化交流と書

そこで、文化交流ですが、文化は、交流によって磨かれます。明治時代に、文明開化の渦中にあっても、書に関する限りは、個人も政府も、東洋から学ぼうとしました。松田雪柯や、明治の三筆と言われた中林梧竹、巖谷一六、日下部鳴鶴といった書家が、大陸との交流を活かして、日本近代書道の確立に努めています。一方、大戦終戦以降、日本の書壇は、諸国に先駆けて、書を通じた国際文化交流を進めてこられた。それは、世界のカリグラフィに可成りの影響を与えました。西洋やイスラム世界では「芸術的なカリグラフィ」を創造しようとする新しい波を生んでいます。また、中国では、文化大革命で雲散霧消した中国書法が復活・再生する一助にもなりました。日本人の進取の気性、面目躍如たるものがあります。

## 3. 書展の効用と事前広報

### (1) 書展の効用

私の赴任先では、書道界のご協力を得まして、行く先々で書展を開催することができました。最後の赴任地スペインでは、マドリードの国立文化・人類博物館で「日本の書展」が開催されました。トップクラスの現代書家80人の作品が各部屋を埋めて、中央の吹き抜けのホールでは、2階まで鈴なりとなった人々の





前で書の技が披露されました。デモンストレーションです。大きな和紙への漢字から色紙への和歌の仮名書きまで、完成のた

びにワットとどよめきが湧きました。実に圧巻でした。テレビも3局が競って中継しました。

日本人は、読めるから、読めない変体仮名や草書に出会うと、そこで鑑賞をやめてしまう。外国人は、読めないからこそ、作品全体を鑑賞しようとする。美しい物を見れば、誰でも感激します。芸術の普遍性というものでしょう。ですから、美しい書を見れば、これは正に芸術だと納得します。入場者は、スペインでは3万5千人、アルゼンチンでは10万人と、信じがたいほどの評判でした。

当振興会では、しばらく控えていた海外展を再開しようとしています。海外から「日本の書展」開催の強い要請がいくつも来ております。今や日本の書芸

術への世界の関心は、少しずつではありますが、しかし、確実に、広がりつつあるというのが実感です。

## （2）書の事前広報の悩み

さて、海外で書展を主催します時に、外交官の最大の悩みは、事前に、日本の書の芸術性をどう説明すればよいか、それもある識者、各界の指導的立場の方々やマスメディアに対して、何と説明するか、という問題です。

西洋では、カリグラフィは、芸術の世界というよりは花文字や飾り文字を書く職人芸の世界と思われています。東洋から芸術的なカリグラフィが来ると聞きますと、極めて懐疑的な、少なくとも半信半疑の受け止め方です。

ではどう説明したらいいのか、色々考えました。よく耳にする説明は、書は「線の芸術である」、「黒白の芸術である」、「構図（コンポジション）」などです。日頃からある程度書になじんでいる日本人には、これで何となく分かった気になれます。

ですが、西洋人相手では、これでは済まない。これですと、彼らは「それでは、絵画とどこが違うのか。藤田嗣治の絵画も、線の芸術と言われてきたぞ」と反論します。「黒白の芸術」となると、今春亡くなったスペインの著名な画家アントニー・タ イピエスの作品にも黒白だけの絵画があります。「構図」となりますと、「全ての芸術がそうではないか」と反撃して来ます。しかも、これらの説明では、書

は文字ではなく、「言葉の表現」であるとの側面が消えてしまう。結論を急ぎますと、視覚に訴える点では絵画の要素もあるし、

前衛書のことには良く存じませんが、言葉表現するという点では文学の要素もあります。更に、音楽的な要素もあります。美しい書を見る度に、平面的で上下運動の少ないペンとは異なり、自由度が遙かに大きい毛筆、その運筆の緩急、強弱、リズムや濃淡から、即興音楽のような調べさえ感じることが出来ます。

少々独善的説明に陥りますが、結局、「日本の書は、絵画的で文学的で即興音楽的な要素を持つ複合的芸術で、それは、書家の独創性と、書道具の発達と、作品を愛でる多くの人々という三者の相互関係から生まれた歴史的産物である」と説明することになりました。

未熟な試みかも知れませんが、かなりの好奇心を誘発できたと思っております。

## （3）書と日本文学、書と歴史的人物

ところで、書には、書芸術を超える「何か」もあります。例えば、書の仮名書きの発明がなければ、世界に冠たる紫式部の源氏物語や、和歌、俳句も生まれなかったでしょう。要するに、日本の書は、日本文学を育みました。また逆に日本文学は、日本の書芸術の発展に大いに寄与してきました。その意味で、書は、日本文化に不可欠な存在であるし、その原動力でもあったとも言えると思います。

また、書の世界では、芸術とは言えなくても、歴史的人物が書いたと言うだけで評価されることがあります。勝海舟や東郷元帥が書いた書は、芸術かどうか意見は分かれるでしょうが、私は好きで、何かに訴えるものを感じます。少なくとも、そこに人柄を彷彿とさせるものを感じます。「書は人である」とは、書に馴染んでいる我々日本人には成程と思わせる言葉です。しかし、異文化の人には、その説明が難しい。歴史的人物の書は芸術的とは言えなくても、そこに何かがある、ことがある。書とは、誠に不思議な世界だと思います。

## 4. 結語

当振興会では、「日本の書展」のほか、主要な課題の一つとして、東京国立近代美術館に書の巨匠の作品を寄贈する試みを始めました。わが国の素晴らしき現代書の芸術作品を永久に保存したいというわけです。今迄こういう系統だったシステムがなかったことが不思議なくらいです。何時の日か、英国博物館やボストン美術館やニューヨーク・メトロポリタン美術館にも、古美術のみならず、現代書も、といった夢もあり得ると思います。最近、中国書法は、ユネスコから世界無形文化遺産の認定を受けました。これをどう受け止めるかも新たな課題だと思います。日本の書を申請するか、するなら、日本文化は中国の亜流だと思っている人達が少なから



ずいますから、彼らも納得させる説明振りや戦略を作り上げなければなりません。大変な大作業になると思います。しかも、中国では、小学校から書道を教えています。日本の書壇が復活再生させた中国書法ですが、日本では、依然片手間です。この調子で行けば、日本は、中国に追い越されるでしょう。このような、内外のせめぎ合いの中で、日本の書は、どうやって将来にわたって良き後継者と、書道具の技術者と、書美術を愛でる幅広い大衆層との三本柱を確保し続けられるのでしょうか。今や歴史的な大きな曲がり角にあると思っております。私は日本のためだけでなく世界のためにも、書の普及と振興に今こそ今まで以上に工夫し協力しあうことが、書を楽しむ私たちの歴史的な責務ではないかと思う次第です。

## 「日本の書展」海外展

全国書美術振興会は設立以来、書を通じて国際文化交流に努めてきた。日本国在外公館や現地公共団体、美術館等の共催を得て、海外において30年間に70回を超える書展を開催し、併せて講演、席上揮毫、実技指導なども実施してきた。

国際文化交流に寄与するという事業としては、近年では平成21年に世界56カ国にある62の日本国在外公館に、105点の書作品を寄贈している。一方で、平成16年以来、海外展は途絶えていたが、この間、書を通じて日本の文化を海外の方に理解していただくことが、在外公館としては文化交流の面で最も良い契機になると、海外各地から「日本の書展」開催の希望が寄せられていた。外務省と協議を重ね、各在外公館に打診したところ、スペイン、ポルトガル、ラオスの在外公館から具体的に要望があり、海外展を再開する運びとなった。駐スペイン日本国大使、駐ポルトガル日本国大使からも「日本の書展」の開催を歓迎する招聘状が届いている。

平成25年11月から平成26年1月にかけてのスペイン展は、日本スペイン交流400周年の記念事業の一つとして開催することになった。支倉常長が伊達正宗の命を受け、通商交渉を目的に慶長遣欧使節団がローマまで渡航したが、仙台を発ったのが1613年で、スペインに到ったのがその翌年の1614年とい

うことで、2013年～2014年を日本とスペインの400年の交流年としている。続いて、平成26年のポルトガル展はポルトガル人と日本との交流が始まって470年の記念として、平成27年のラオス展は日本・ラオス国交樹立60周年記念としての開催希望となっている。

第41回「日本の書展」で現代書壇巨匠・現代書壇代表に委嘱される先生方に出品をお願いし、90数名の参加の返事をいただいている。釈文原稿締め切りは翻訳のため平成25年1月18日としているが、作品締め切りは4月1日をお願いしている。

この海外展開催によって、ヨーロッパからアジア圏まで広く「日本の書」の認知度が上がり、書の芸術性や技術の高さが認識され、ひいては「日本の書」の発展や国際文化交流の発展につながることを願っている。

## 展覧会案内

### 第41回「日本の書展」

#### 関西展

平成25年5月30日(木)

6月2日(日)

大阪国際会議場(3階イベントホール)

午前10時～午後5時「最終日は午後4時閉館」

主催 (公財)全国書美術振興会・産経新聞社

後援 文化庁(予定)

協賛 (公社)日本書芸院

## 中部展

〈第1会場〉

現代書壇巨匠・現代書壇代表・委嘱・招待

平成25年6月5日(水)

6月9日(日)

愛知県美術館ギャラリー(愛知芸術文化センター8階)

午前10時～午後6時「7日(金)は午後8時閉館、最終日は午後4時閉館、入館は各日も閉館30分前まで」

〈第2会場〉

秀抜選

平成25年6月4日(火)

6月9日(日)

名古屋博物館(3階ギャラリー)

午前9時30分～午後5時「最終日は午後3時閉館、入場は各日も閉館30分前まで」

主催 (公財)全国書美術振興会・中日新聞社

後援 文化庁・愛知県・岐阜県・三重県・名古屋市長・各県市教育委員会・東海テレビ放送(予定)

協賛 (公社)中部日本書道会

#### 東京展

#### 公募臨書

平成25年6月13日(木)～6月23日(日)

18日(火)は休館日

国立新美術館(展示室1A・1B・1C・1D)

午前10時～午後6時「入館は午後5時30分まで」

主催 (公財)全国書美術振興会・共同通信社

後援 文化庁(予定)

## 九州展

平成25年7月4日(木)

7月9日(火)

福岡アジア美術館(7階企画ギャラリー)／8階交流ギャラリー

午前10時～午後8時「最終日は午後5時30分閉館、入館は各日も閉館30分前まで」

主催 (公財)全国書美術振興会・西日本新聞社

後援 文化庁(予定)

※開催情報は変更となる場合があります。

## 役員一部改選

代表理事・会長

荒船 清彦

代表理事・理事長

津金 孝邦

業務執行理事・常務理事

新井 光風

岡田 契雪

鈴木 春朝

有岡 郊崖

江口 大象

師田 久子

鈴木 一敬

田中 節山

仲川 恭司

村上 俄山

角元 正燦

横山 煌平

監事

真神 巍堂

今村 桂山

大平 匡昭

清水 透石

高木 聖雨

内藤 富卿

星 弘道

※任期 平成24年12月3日開催の定時評議員会／平成26年12月開催の定時評議員会

## 近年物故者

次の先生方が逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

平成23年

勝瀬景流先生(評議員)

12月5日 70歳

平成24年

杉岡華邨先生(名誉顧問)

3月3日 98歳

久保田正孝氏(参事)

4月1日 85歳

中道春陽先生(参事)

4月24日 90歳

## 書美術功労者の顕彰

日本芸術院賞を受賞された星弘道先生の功労を顕彰し、記念品を贈呈した。

あとがき

公益財団法人としての初年度は平成24年2月1日から9月30日の8カ月という変則になりました。この間「日本の書展」の40回展という節目の展覧会実施、初めての「公募臨書」展、東京国立近代美術館への書作品寄贈、そして9年ぶりとなる海外展実施決定などの事業を重ねています。書家の先生方、関係各位のご協力の賜物と感謝しております。(坂本)

## 事務所のご案内

〒107-0052

東京都港区赤坂2-11-1 宮原ビル6階

TEL 03-3568-2071

FAX 03-3568-2072

ホームページ <http://shobi.or.jp/>

メールアドレス [info@shobi.or.jp](mailto:info@shobi.or.jp)